しが国際協力親善大使レポート

菱田（ひしだ）　実（まこと）さん

隊次：２０１９年度１次隊
職種：食用作物・稲作栽培
派遣国：ザンビア

自己紹介

蒲生郡竜王町出身。中学校のときに、先生から青年海外協力隊のことを教えていただき、将来は海外、特にアフリカに行ってみたいと考えるようになりました。農業について学んでいた大学生のときにウガンダで短期隊員として活動したことで、さらにアフリカに長く住んで活動したいという思いが強くなりました。そして、2019年7月より食用作物・稲作栽培隊員として任国ザンビアへ赴任しています。

活動している国、地域の気候や文化の紹介

農村の子どもたちと

私の派遣されているザンビア共和国は、アフリカ大陸の南に位置する内陸国です。

日本の約2倍の国土に70以上の部族からなる1,600万人の国民が、「One Zambia, One Nation」のスローガンのもと暮らしている、アフリカの中でも最も平和な国の一つです。

南半球にあるので、季節は日本とおおよそ逆になり、乾季（5～11月）である5月から7月が寒く、乾季から雨季（12～4月）に変わる10月から12月が暖かいです。昼間は40度になり暑いと感じる日もありますが、湿度が低く、日本の真夏日のようなことはなく過ごしやすいです。

2020年は東京オリンピックですが、前回の東京オリンピック（1964年）の閉幕日に国名が北ローデシアからザンビアに変わり、開会式と閉会式で国旗が異なるという面白い歴史もあります。今年も10月24日は独立記念日として街がにぎわっていました。

③ 活動や生活について：

私は、ザンビアに10か所ある農業研究所（ZARI）の一つに配属されています。

配属先のマンサ農業研究所は、首都ルサカから北へ約800kmに位置するルアプラ州の州都マンサにあります。地方都市の中では発展しており、最低限の食材や日用品は容易に入手することができます。

私の活動は、お米を栽培することです。ザンビアは、南部アフリカ地域の水資源の約40%有しており水が豊富です。その中でもルアプラ州は水が豊富な地域で、稲作に適しているといわれる場所が多くあります。しかしながら、ザンビアの主要作物はメイズ（トウモロコシ）で、農地の

全作付面積の52%を占めています。ザンビアの主食のシマは、メイズ粉を主としてキャッサバ粉などを混ぜて作られるため、メイズはザンビア人には欠かせない食料です。そのため、お米は一部の地域を除いてほとんど栽培されていない作物です。需要はありますが、ほとんどを隣国から輸入しているのが現状です。そこで、メイズ栽培では利用しない、年中水があるような湿地帯を活用して稲作を普及するのが活動の目的です。

ワークショップの様子

実際の活動は、JICAの稲作普及プロジェクトという支援が行われており、日本人専門家の指導の下で、適地選びや種まき・除草・肥料の播き方・収穫方法・乾燥の方法などのお米の栽培方法を伝えるため、近隣の農村を回っています。村を訪問しワークショップを行うと、農家さんは食料に困りたくない、お金に換えられる新しい作物としてお米に興味を示してくれて、決して上手ではない私の片言の英語の説明を熱心に聞いてくれます。畑の準備についても、日本のようにトラクターはもちろん、耕うん機も高価なものです。一部では牛耕（牛に犂を引かせて耕起する）がありますが、ほとんどが鍬一本持って、村人みんなで一枚の畑を耕すというのが一般的です。日本の50年前の光景が見られます。私も、村人に混ざり耕起をしましたがとても重労働です。異国の地で、私たちの親の世代、いやもっと前のおじいさん、おばあさんの世代がしていたような仕事を体感しています。小学生、中学生の皆さんにとっては、もしかしたらおじいさん、おばあさんも知らないことかもしれません。

そして、ザンビアの人々は、一つひとつの仕事が生活に直結しているのでよく働きます。ただ、皆さんがイメージするようなアフリカ人の一面も見ることができます。とても陽気で農作業中もずっと話をしていますし、時にはダンスを踊ったりもします。疲れを感じさせない一面もありつつ、度が過ぎるとイラっとするときもあります。

牛耕の様子

クワでの耕起

ザンビアに赴任して4か月が経過し、乾季から雨季に変わり、ようやく活動が始まったという時期にこのような活動を紹介させていただく機会を得ました。まだ十分な活動ができていませんが、今はただ3-4月によいお米が収穫できることを願っています。まだまだ英語だけでなく、現

地語のベンバ語は挨拶程度しかできません。これから語学を習得して、もっと内容の濃い取り組みや文化紹介を来年報告できたらいいなと考えています。